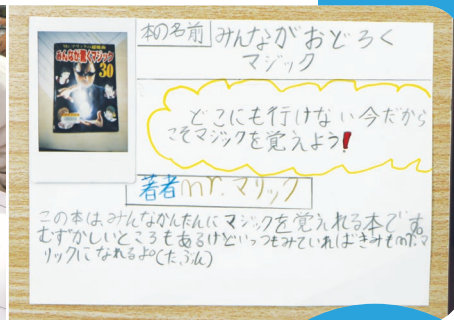


ボランティア情報



福祉教育わたしの実践

福岡県 上毛町社会福祉協議会 地域福祉 係長 中村 麻衣さん



【暮らしと福祉のつながりを、「しあわせ図鑑」で表現】

上毛町社会福祉協議会(以下、町社協)の中村さんは、毎年小学校のクラスの特性に適した福祉教育プログラムを考案しています。2021年度は、「自分を表現できる子が多い」と先生が感じていた小学4年生に向け、「ふだんのくらしのしあわせ図鑑をつくろう」というプログラムを企画しました。

プログラムの特長は、福祉について学び、車いすなどの体験を経て、図書館で「しあわせ図鑑」を作成することです。福祉とは「ふだんのくらしのしあわせ」であると子どもたちに気づいてもらい、それぞれが感じる“幸せ”に関する本を自分の言葉で推薦してもらいました。そして、図書館にコーナーを設け、子どもたちが選んだ本を「しあわせ図鑑」として展示しました。

中村さんは、学校の授業のカリキュ

ラムと連携すれば福祉教育の学びが深くなると考えています。そのため、図書館で見つけた本を紹介する国語の授業のカリキュラムを取り入れた「しあわせ図鑑」作成のアイデアを思いつきました。小学校の図書室ではなく町の図書館を利用することで、一般図書にも目を向けてもらい、子どもたちが視野を広げられる機会にもしました。

プログラムを実践するなかで中村さんが子どもたちに伝えたのは、「失敗もOK。全員がチャレンジしよう!」という思いです。福祉教育では正解も不正解ありません。そして、関係者には、「子どもたちの『つぶやき』を受け止めてほしい」という思いを事前に共有します。かれらが学ぶ楽しさを感じ、自己肯定感を高めるきっかけになればと考えています。

事後学習では、支え合いの取り組みの実践として赤い羽根共同募金の街頭募金を実施しました。「子どもたちにも社会や地域に貢献できる力があると気づいてもらいたい」と中村さんは語ります。また、児童が作成したチラシは地域住民の共同募金への理解を広めるのにも効果的とのこと。「児童から大人への種まきも大切にしています。子どもたちのメッセージなら大人は耳を傾けてくれますから」(中村さん)。

このプログラムは、地域のさまざまな方々の協力のもとで実践されました。日頃の町社協の業務が福祉教育に活かされるとともに、福祉教育で生まれたつながりを他の業務に活かせる、中村さんは意欲を見せます。今後も地域と連携した福祉教育は続いています。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 今、あらためてボランティアのこれからを考える
～変化するボランティア活動とこれからの市民社会とは～
- P.6 ▶ **実録ボランティアコーディネーター**
- P.7 ▶ **必見! ファシリテーションを学ぼう!**
- P.8 ▶ **防災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う**

今、あらためてボランティアの これからを考える

～変化するボランティア活動とこれからの市民社会とは～

時代の変化や社会課題の多様化により、ボランティアを取り巻く環境は大きく変化しています。こうした状況を受け、「広がれボランティアの輪」連絡会議(以下、「広がれ」)では、広がれ創設30年を迎える2024年に向けて、「今、あらためてボランティアのこれからを考える」をテーマに、ボランティア全国フォーラム 2022を開催しました。

特集では、ご登壇いただいたボランティア活動の場に直接携わる方々や学識者による熱いスピーチ、そしてディスカッションの模様を伝えることで、変化するボランティア活動の役割や課題を明らかにするとともに、これからの市民社会を展望したボランティア活動を考えるきっかけを提起します。

変化するボランティア活動とこれからの市民社会

キーコンセプトスピーチ

● 上野谷加代子さん(「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長) ● 田尻佳史さん(NPO 法人日本 NPO センター 常務理事)

ボランティア活動の 変化と意義を考える

田尻 まず、近年のボランティア活動の変化についてうかがいます。

上野谷 少子高齢化の影響もあり、10代～20代、40代の活動者が減少し活動者の高齢化も目立っています。しかし、歳を重ねても私はますます元気ですから高齢化が悪いとは思いません。

また、社会的課題が複雑になっていることから、活動領域がとても広がっています。私も自分のことを振り返ってみて、最近ようやく外国ルーツの人や医療的ケア児などへの支援が不十分だったことに気づきました。

田尻 政策として支援や見守りを行う動きも出てきました。

上野谷 これまでの活動が政策につながった事例だと思います。しかし、自主的な活動ではなく「活動させられる」

という感覚が芽生えたと、活動は長続きしません。そもそもボランティアは権力から遠いところにある存在で、自由な活動です。私は1人の美しい人間であり続けたいとの思いを実現するのがボランティア活動の源泉だと思っています。そして、社会をよりよくしたいという「願い」、将来に対する「期待」がボランティア活動だと考えています。しかし、一人の力ではそれを展開できないので、皆で物語として紡いでいく必要があるわけです。皆で一緒に活動すれば、社会は少しずつ変わるのではないのでしょうか。

共感と共有を重ねて よりよい社会に

田尻 ボランティア活動が、活動者の学びや自己実現につながるといわれる点についてはいかがですか。

上野谷 私は「へえー」という気づきが好きです。これは共感のもとになります。共感とは行動のきっかけになり、お互いにとっての力にもなります。「広がれ」はそういうプロセスが実現できる仲間のネットワークだと思います。

田尻 私たちボランティア推進者は

推進機関として、気づきや発見、共感できる環境をどのようにつくるのか。やはり縦にも横にも斜めにもつながり、連携や協働をしていくことが大切ということですね。

上野谷 そうです。つながり、共有することが大切です。私たちは組織的に共有し、蓄積し、伝達していくことが、少し弱いようです。その意味でも、仲間を大事にしたいと思っています。

田尻 本フォーラムを気づきや学びを蓄積する機会として、自分の組織だけではなく多くの場所で学びを共有していただきたいですね。

上野谷 ちょっと強引にでも仲間を誘って学び合い、対話をし、体験する機会をもってほしいと思います。

田尻 それが社会をよりよくすることにつながるのですね。

上野谷 2024年の「広がれ」30周年に向け、私も悩み、考え、跳びはねなが



上野谷加代子さん(写真右)によるキーコンセプトスピーチ。進行は田尻佳史さん(写真左)



テンポ良く軽快なトークを繰り広げる、上野谷加代子さん(写真右)と田尻佳史さん(写真左)

ら前に進んでいきたいと思います。

ボランティアの課題と可能性

オープンディスカッション(第1部)

- 仁平典宏さん（東京大学大学院教育学研究科〈教育学部〉教授）
- 伊藤 章さん（NPO 法人 国際ボランティア学生協会〈IVUSA〉理事）
- 鈴木訪子さん（認定 NPO 法人 おもちゃの図書館全国連絡会 理事長）

それぞれの立場から見る ボランティアの状況

鈴木 私は、1982年に障害のある子どものお母さんたちと一緒に東京都荒川区でおもちゃ図書館を設立しました。1986年に荒川区社協の運営で常設となったことを機に、ボランティアで活動していた私も社協職員となり、定年まで勤めました。荒川区は町会や自治会がとても活発で、いい意味でおせっかいな方が多い地域です。近年はコロナ禍で人と人とのつながりが弱くなってきましたが、子どもの支援に関わるボランティア活動は非常に盛んです。

伊藤 私は、2008年頃から国際ボランティア学生協会で活動しています。今年で設立30年目を迎え、現在2,500人ほどの大学生が所属する団体です。現地で地域の方だけではできない活動を行うのが特徴ですが、コロナ禍で2年ほど活動ができませんでした。4年間で卒業する大学生にとって2年のブランクは大きく、活動の経験やノウハウの継承が難しくなっている状況です。また、大学生の活動への向き合い方が二極化してきています。ひとつは活動をSNSで発信することを重視する「キラキラ系」の大学生。もうひとつは、自分の趣味や仲間との活動で完結し、社会への発信には消極的な大学生です。とはいえ、ボランティアに関心をもつ大学生は増えていると感じます。

仁平 私は社会学という領域からボランティアを巡る言葉や意識をテーマに研究をしています。大学3年時にボランティア活動に携わって以来、市民セクターに関わっていますが、実は私は社会活動に取り組む同世代をシニカルに捉える学生でした。先ほど伊藤さんから「社会への発信に消極的な大学生がいる」とのお話がありましたが、当時

の私のようなタイプからの目が気になることも、活動者が自ら発信しない理由のひとつだと思います。これは日本社会の困った点で、なぜ日本にはボランティアを冷たく見るまなざしがあるのかについて、歴史的な面から研究することも仕事としています。

日本における ボランティアの現状とは

仁平 「World Giving Index」という、世界のたすけあいや寄付に関するランキングがあります。昨年のデータによると、日本は何と全対象国中の最低ランクでした。日本は東日本大震災などを経験し、市民活動の重要性がわかっているはずなのにこの結果です。また、NPOやNGOのリーダーを信頼していないというデータもあります。つまり、いまだに非営利に対する理解が広がっていないことがわかります。

鈴木 地域にはさまざまな課題を解決しようとする活動者が増えているのですが、ご紹介のデータはやや実感がわかないのですが、いかがでしょうか。

仁平 実は、鈴木さんが感じておられる状況につながるデータもあります。国の社会生活基本調査において、過去1年間にどのくらいボランティアをしたことがあるかを聞いたところ、20%半ばから後半くらいの方が「ある」と答えました。こちらは世界的に見ても遜色のない数字です。一方は最低レベ

ルで、もう一方は大差ない数字という状況をどう考えればよいのか。これは「つながりの力には2種類ある」という説で説明できます。ひとつは、立場が違う人、見知らぬ他者とつながる「ブリッジング（橋渡し）型」です。慈善活動でイメージされることが多く、日本はこれが弱いとされています。一方で、同じ立場や集団、地域でつながる力が「ボンディング（結合）型」です。日本はこれが比較的強いとされています。鈴木さんの活動は、同じ地域でありながら立場を超えてつながるもので、この2種類の両方の面をもつ活動だと思います。

時代や社会状況で変化する 活動のあり方と可能性

伊藤 大学生と活動していると、やはり若者だからこそできることが多いと感じます。例えば、地域に意外とあっさり受け入れられ、関係性も築けるといいます。大学生は活動から学びを得られると同時に、地域活動の活性化への効果も大きいので、多くの学生に活動を経験してほしいと思います。

一方で、大人は自分たちの成功体験を押し付けないことが大切です。大学生は、無意識のうちに大人の顔色をうかがっています。そういう忖度をされないよう、こちらから丁寧に大学生の希望などを聞き取りながら活動することが大切だと感じています。

鈴木 現代の地域社会は、「余計なお世話」をしなければ、住民の困りごとを見つけれなくなってしまうかもしれません。そして、それを実践できるのは、やはりボランティアです。

仁平 ここ数年、頭を悩ませているのが「やりがい搾取」という言葉です。これは、ボランティアにとってあまり



第1部の登壇者。右から伊藤章さん、鈴木訪子さん、仁平典宏さん。

助成金情報

（公財）公益推進協会「横寺敏夫 患者と家族の支援基金」（2023年2月13日締切）

療養中の患者さんやご家族のサポートを行う団体への助成。

（詳細は「横寺敏夫 支援基金」で検索）

ポジティブではありません。職場でも地域でも関係性が希薄化・流動化し、見返りが見えにくくなるなかで「何のためにやるのか」と意味を問われ始めたのが2010年代です。

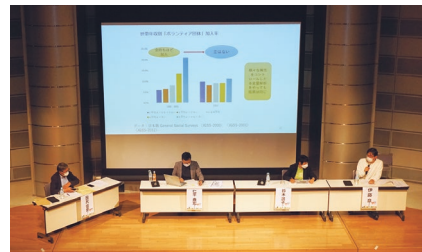
一方で、集団のつながりが弱い時、逆に見知らぬ他者への信頼度が高くなり、慈善活動が発展します。日本は確固とした集団の社会から、他者への信頼を必要とする社会へと大きく変化していく可能性があります。これまでの日本人は、立場を超えた見知らぬ他者につながる活動への理解が難しかったかもしれません。しかし、ボランティア型の社会が揺らいでいくなか、こうした潜在力が花開く可能性もあるのではないかと考えています。

参加者の声を受け止める

会場でご参加された方からは、「行政やメディアが注目する活動に参加する大学生が増えている」(A大学・職員)、「ビジョンのある大学生と、そうでない学生がいる。新しい手法を取り入れたプログラムも必要」(B大学・職員)という意見がありました。

それらに対して、地域で活動する鈴木さんは、子ども食堂や子どもの居場所に参加する大学生が多いことに実感を持っているといいます。そして、大学生とともに活動する伊藤さんは「大学生の『できれば何かやりたい』という気持ちをどう形にしていけるかが大

事」とし、さらに大学生の傾向として、仁平さんは「若者の価値観」について言及します。「若者には市場に評価されることが格好いいという価値観があります。社会課題の解決にコミットするのが格好いいと思えるような価値観が広がることが必要です」と指摘します。



参加者からの質問に答える登壇者

これからのボランティアを広げるために

オープンディスカッション(第2部)

- 後藤麻理子さん (認定 NPO 法人 日本ボランティアコーディネーター協会 事務局長)
- 高橋良太さん ((社福) 全社協 全国ボランティア・市民活動振興センター長)
- 阿部陽一郎さん ((社福) 中央共同募金会 常務理事・事務局長)
- 永井美佳さん ((社福) 大阪ボランティア協会 常務理事・事務局長)

「ボランティアの輪」は広がっているのか

高橋 ボランティア活動を主体性や無償性で捉えるとあまり広がっていないかもしれませんが、最近は福祉に限らないまちづくりや社協を通さないボランティア活動も数多くあります。そのなかで社協はどうすればいいのかについては、私も悩んでいます。「広がれ」が、どの活動までを射程にするかについても議論のポイントとして考えなければならぬと思っています。

後藤 当会はボランティア連絡協議会(以下、ボラ連)からさまざまな相談をいただきますが、全国的に見るととて

も影響のある活動をしているボラ連がある一方で、形骸化しているところがあるなど、同じボラ連でも格差があります。例えば、活発なボラ連は新しいテーマで学習会をしたり、講演型からディスカッション型やワークショップ型にしたりと、試行錯誤をしながらさまざまなチャンネルから新しい情報をつかもうとしています。社協とボラ連と一緒に活動する存在としてタッグを組み、しっかりと議論していく必要があると思っています。

永井 大阪では、幅広い年代の人がボランティア活動に参加していただけますが、団体などに所属することは求めている気がします。ボランティアには興味があり、できることがあればしてみたい。しかし、団体のメンバーになって、役職を引き受けることまではしない。ですが、私はむしろこうした人たちが増えることは、活動者を広げるひとつのヒントになると考えています。例えば、大阪で「ゆるボラ(ゆるいボランティア)」というサークルを始めたと、LINEの登録者が爆発的に増

えました。活動をしたい人は一定数存在し、手法もいろいろあると感じました。推進者側の私たち自身も学びを続けながら、活動の広がりについて意見交換をしていきたいと思っています。

これからのボランティアのために何をするのか

後藤 ボランティアが人生そのものという人もいれば、生活の一部として大切にしている人もいますし、少しかじっただけの人もいます。多様な関わり方があってよいのですが、私自身は、市民のひとつの権利としてボランティアを守りたいと思っています。一つひ



阿部陽一郎さん(写真左から1人め)の進行でオープンディスカッションが始まった。写真右から、高橋良太さん、後藤麻理子さん、永井美佳さん



第1部の登壇者も交えながら、会場やオンライン参加者の意見やコメントをもとに対談を行った

とつは小さな力ですが、やがて何かを変えていく大きな力になると信じて長年推進をしています。しかし一方で、ボランティアを消極的に捉える層があるのも確かです。ボランティアという言葉を使わずに、ボランティアな精神

や活動を広げられるような柔軟性もち合わせて進んでいきたいと思います。**高橋** 全国でボランティアセンター(以下、VC)を構える社協は8割を切っています。VCがあれば地域の人と活動ができますし、多様な相談を受け止

めることも、制度にはない活動を立ち上げることもできます。現在、新たなVC推進方策の策定を進めており、今後もVCの役割と可能性を発信していきます。

まとめと今後の展望に寄せて

サマリーコメント

●山崎美貴子さん(「広がれボランティアの輪」連絡会議 顧問)

客観的な視点と本気の行動で ボランティアを広げる

今回はさまざまなお話をうかがうことができました。上野谷さんのお話にはいつも魅入られます。小さな言葉の先にはかなり大きなことをおっしゃるのでドキドキしますが、そこには共感する力があります。田尻さんはボランティア活動の変化や意義に切り込みながら、ボランティア活動の推進者に求められる視点をご提供いただきました。

登壇者の伊藤さんは、大学生の時代的

な変化をしっかりと見据えて活動をされています。鈴木さんとは子ども食堂の活動で一緒にすることが多いのですが、その活動ぶりにはいつも学ばされています。仁平さんは、非常に幅広い視点と歴史観を土台に、ボランティア活動がどんなものかをお話してくださいました。

オープンディスカッション第2部では、コロナ禍で止まってしまった議論を交わすことができました。確かに以前とは状況が変わり、ボランティアセンターの立ち位置や役割も違ってきていますが、そこを客観的に見つめながら、本気でボランティ

アのこれからのために行動しなければならないと、改めて感じました。2年後の「広がれボランティアの輪」連絡会議30周年に向け、皆さまにも協力いただけたらと思います。



本フォーラムの最後に、お話しされる山崎美貴子さん

ボランティア全国フォーラム 2022 を振り返って ～ボランティアの今日的な価値とは～

今回のフォーラムでは、全国各地から2日間で延べ330名が参加し、「ボランティアのこれまでとこれから」を考えるきっかけとなりました。本特集の最後に、「ボランティアのこれまでとこれから」から見えてきた、ボランティアの今日的な価値を考えましょう。

まず、そもそも「ボランティア」とは何なのでしょう。それぞれにボランティアに対する考えや思いがあり、同じ部分も違う部分もあると思います。つまり、ボランティアについて一概に定義することは難しく、各時代や環境に応じた多様性に富んだ言葉であるからこそ、「新しい価値」を生み出す可能性が高いともいえます。『ボランティア：もうひとつの情報社会』のなかで、金子郁容氏は「ボランティアとは、切実さをもって問題にかかわり、つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を創造する人」(金子 1992: 7) すな

わち、ボランティアを「新しい価値を創造する人」と定義します。

本フォーラムでは、「若者の力を活かす」「見知らぬ他者への信頼感」などのボランティアの「新しい価値」となりうるキーワードが出てきました。このような「新しい価値」を支えるためには、キーコンセプトスピーチで、上野谷さんが言及したように、「ボランティアをすることが市民の自由な権利として保障されることが不可欠」であると考えられます。こうした権利としてのボランティアを保障するために、推進者には何ができるのでしょうか。市民一人ひとりのボランティアへの思いや広く社会への思いを受容すること。そして、ボランティアをする人/される人の「気づき、共感、行動」という循環をつないでいくこと。さらには、ボランティアという他者を思いやり、利他を目的とする活動やつながりのなかで、人間の弱さを受容し合う相互依存的

な関係性を肯定し合うこと。こうした営みを重ねていくための手段として、読者の皆さんをはじめ全員が連携・協働していくことが大きな力となっていきます。こうした対話が、多くのボランティアの間でオリジナルの物語として紡いでいくことで、ボランティアをする人/される人の空間を越えて、地域社会のよりよい状態である社会的ウェルビーイングの向上につながっていくのではないのでしょうか。



円形のホールで紡がれた「ボランティア」に関わる人々による議論は、これからも輪のように広がっていく

助成金情報

(公財)浄土宗ともいき財団「令和5年度助成」(2022年2月10日締切)

寺院を会場にした「子ども食堂」「学習支援」「グリーンケア」など、NPO・市民団体と寺院が協働して行う活動に対して助成。

(詳細は「浄土宗ともいき財団助成」で検索)

ボランティアセンターのコーディネーターは、今、どのようにボランティアの皆さんや地域と連携・協働し、まちを暮らしやすくする活動に取り組んでいるのでしょうか。
ボランティアセンターを支える「人」に焦点を当て、ボランティアセンターの役割を考えます。

第10回

地域のすてきな人たちの
出会いが財産になる仕事

香川県 善通寺市社会福祉協議会

社協
紹介

善通寺市：人口30,745人（2022年12月1日現在）

香川県北西部に位置する善通寺市は平安時代より善通寺を中心に栄え、現在は陸上自衛隊の駐屯地や国立病院、大学など数多くの公共機関が所在する。善通寺市社会福祉協議会（以下、市社協）は、職員全体でさまざまな業務を担当し、地域の文化や歴史、時代や政策を活かした地域づくりに取り組んでいます。



善通寺市社会福祉協議会 地域福祉係
おおふじ ちづ 大藤 千津さん

Q ボランティア業務に携わって
何年目ですか？

A 20年目です。ボランティア業務を一手に引き受けていた時期もありましたが、今は職員全体で業務を細分化して担っています。私はボランティアグループの支援や地域づくり、地区社協の事業の推進や、民生委員・児童委員の事務局などの業務に携わっています。

Q 20年間で、ボランティアは
どう変化しましたか？

A コロナ禍の影響もありますが、それ以前からの高齢化や担い手不足などにより、ボランティアグループの数がかなり減りました。そうしたなか、地域で活躍できる人材を養成するため、団塊の世代を対象にした講座や精神保健福祉などの課題に特化した講座を開くなど、その時代や地域課題に合わせた企画を実施してきました。また、ボランティアの方に新しい活動を紹介するなど、活躍できる場につなぐことにも力を注ぎました。

Q 期待を寄せている地域の
ボランティア活動は？

A 2016年に市内にオープンした善通寺市地域支え合いセンター「ここ家」で行っている「日替わりシェフの店『なないろ』」の活動です。「なないろ」を始めるにあたり、食をきっかけに、地域住民がともに活動の場をつくる「ワン

ディシェフチャレンジ講座」を開催しました。地域でお店を経営していた人や将来自分のお店をもちたい人、給食センターで働いていた人など25名のシェフとアシスタントが集まり、始まりました。日替わりで作り手を交代しながら地域の人にランチを提供しており、1食750円で提供しています。利用者は毎日30人前後です。食材費や消耗品費など活動に関わる経費はすべて作り手の出費とし、市社協からの補助金などは一切ありません。その分、売り上げは全額作り手の収入にしてもらっています。

特徴は「市社協のお店」ではなく、作り手が1日オーナーとなる点です。そうすることで、作り手がそれぞれの得意を活かせると同時に、作り手や利用者同士が、ふれあい、つながる場となっています。コロナ禍の影響もありましたが、令和3年度は年間107日オープンし、延べ280名ほどの作り手の参画と約3,100名の方が利用しました。

Q 業務で意識しているのは
どのようなことですか？

A 人と人がつながる場をつくるためには、まず私のことを地域の皆さんに覚えてもらい、相手の方に安心して話してもらえる関係をつくるのが大切です。日頃からなるべく地域に出かけたり、市社協を訪れた方に元気よく声をかけたりすることを心がけています。最近の若い方のなかには、そういうことが苦手な方

も多いかもしれません。しかし、実は私も若い頃は人見知りで、どう声をかけてよいのかわかりませんでした。若い方へのアドバイスになるかわかりませんが、自分のことを話したり相談したりするくらいの気持ちで接するとよいと思います。

Q ボランティアコーディネーターの
魅力を教えてください

A 地域のいろいろな方と出会えることです。その出会いが今の私の財産になっています。ボランティア活動というのは、できそうで実はなかなかできないことです。そんな活動に思いをもって取り組んでいる方たちは、本当にすてきです。



日替わりシェフの店なないろの
シェフ&アシスタントの皆さん

大藤さんへのひとこと

大藤さんは日々の活動のなかで人に寄り添うことや、一緒にじっくり考えることを大切にしていると感じます。その姿勢は地域の方との関わりの中だけでなく、大藤さんに話を聞いてもらった励ましてもらった県内社協職員は多くいて、私もその一人です。温かいすてきな先輩です。

社会福祉法人 香川県社会福祉協議会
地域福祉課 十河 真子さん

必見! ファシリテーションを学ぼう!

話し合いの場づくりに重要な役割を担うファシリテーションのノウハウを、1年間かけて学びます。社協職員やボランティアコーディネーターのみなさん、一緒に学び、実践に活かしていきましょう。

ファシリテーションの力が、
地域を、ボランティアを元気にする!

第10回

話し合う人数を変える グループサイズ

の巻



子どもの頃、ボランティア活動を通してワークショップと出会う。人事労務コンサルタント会社を経て独立。現在、ひとりひとりが「尊重され、存在できる」場づくりをめざして福祉をはじめさまざまな分野で会議やワークショップを進行。また、その手法と考え方を「ファシリテーション」を伝える研修を企画・実施している。

特定非営利活動法人
日本ファシリテーション協会
フェロー 鈴木 まり子さん

1 主体性を削ぐ 「〇〇さんどうですか」

会場全体がし～んと静まる。沈黙が続く。焦るファシリテーター。色々問いかけてみても、再びし～ん。そして、ファシリテーターは「Aさん、どうですか?」「Bさん何かありませんか?」と、ついに我慢できずに指名を始める。こんな場面を体験したことはありませんか?

ファシリテーターが指名すると参加者にどんな変化が起こるでしょうか。まずは「今度は自分が指名されるかもしれない」と思い「指名されたら何を発言したらいいのか」を考え始めます。結果、他の参加者の発言を聴く余裕はなくなります。また「言おうか、どうしようか」と迷っていた参加者は「指名するなら、無理に発言しなくてもいいかな」と思い、意見をしまい込んでしまいます。

自ら手を挙げて発言する場を「参加者が主体的に関わっている場」だとすると「指名されて発言する場」は、その対極にあると思うのです。特に何かを合意して決める会議では、指名が続くと合意形成が難しくなります。ファシリテーターが指名し、参加者が答える、ファシリテーターが指名し、参加者が答えるの繰り返しでは、発表会が続いているようなものです。その結果、創造的な議論になりにくく、参加者同士で納得して決めていく流れができにくくなるのです。

2 自分ごとになる グループサイズ

オリエンテーション(第7回・10月号)やチェックイン(第8回・11月号)でも挙げられた、「でも発言が出ない」というときに、参加者を指名しない方法としておすすめなのがグループサイズの変更です。人数を変えるだけです。参加者は参加人数が多いと「別に私が話さなくても誰かが話さだろう」と考えがちです。ですから人数を少なくすると驚くほど発言が増えます。特に二人ひと組にするとほとんどの参加者が話し出します。二人ひと組で短い時間話してもらった後、ファシリテーターが「出たアイデアを紹介してください」と促すと、参加者は「ここで出たアイデアですが」と言って紹介してくれます。また、会議の時間が短いのに参加者が多いときもグループサイズの変更は効果的です。人数を少なくするほど、一人の発言できる時間は長くなるからです。参加者に問いかけても発言が出ないときには、一人も効果的です。「今の質問について、ちょっと一人で考えてメモしてみてください」と説明して待ち、そのあと紹介してもらおうのです。

3 小さくはじめる

会議の場で最初から最後まで、「全員で」話し合わなければならないという決まりはありません。一人で考える、二人で聴きあう、3人で話し合う、小グループで議論する、全体で共有するなど、限られた時間の中で工夫をしてみましょ



グループサイズを二人に変えると話しやすくなる

う。グループサイズの変更は、ファシリテーターにとってダイナミックにプロセスを変える行為でもあります。今まで全員で話し合っていた文化の中で、グループサイズを変えるのは勇気がいるかもしれません。そこで、会議や話し合い、講座などで、小さくちょっとだけグループサイズを変えてみることから始めてみませんか?例えば、長方形型の座り方のままで「アイデアが出ないようなので、お隣のひとと二人で2、3分お話してみてください」という感じです。場が活気づき空気が変わることを実感できるでしょう。皆さんが参加者であるときには、「今日は参加者が多くて意見が出にくそうなので、少し人数を変えてみませんか」とファシリテーターに提案することもできるでしょう。ぜひ「今日は誰も指名されなかったけど、有意義な話し合いだった」という場づくりにチャレンジしてみてください。

グループサイズ 人数を変える

- ・ 全員の前にいきなり発言するのは誰でも難しい
- ・ 特定の人だけが話続けるより、より多くの人が話せる機会を作る
- ・ 会議でも全員で話すとは限らない

★ 様々なグループの大きさの特徴に習熟しよう

- 1人 : じっくり考える時に
- 2人 : ほぼ全員が話せる
- 3人 : 発言が少し多様になる
- 4人 : より発言が多様になる
- 5～6人 : 小グループでの作業になる

オンラインでは
ブレイクアウトルーム
を活用しよう

全員 : 全体で共有する

書籍紹介

『月刊福祉』2022年2月号(全社協出版部) 価格1,068円(本体971円)

特集は、「さいご」を迎えようとする人のQOLを支えるケアに求められる環境整備や支援、福祉関係者が備えるべき知識や姿勢等について確認する。
(詳細は「福祉の本出版目録」で検索)

被災とともに駆けつけ、
協働で支援し、
被災者に寄り添う
～災害ボランティア・NPOの先達紹介～

各地で災害が発生した際、いち早く被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターや社協と連携・協働を進め、被災者への支援を行うボランティア・NPOの活動を紹介します。

第10回

災害情報支援ポータル

ホームページ: <http://saigaiinfo.jp/>Facebook: <https://www.facebook.com/saigaiinfoportal/>

かみむら たかひろ

上村 貴広 災害情報支援ポータル 代表

災害支援のNPO等を経て、支援現場でのICT支援ニーズを痛感、団体を立ち上げ伴走支援を心掛ける。浦安市社協では常設型災害ボランティアセンターの専門スタッフを経験する



災害VCのICT支援をお手伝い

災害情報支援ポータルは、災害ボランティアセンター(以下、災害VC)でのICT支援、社会福祉協議会や災害時の復旧・復興支援団体への情報発信を目的に、任意団体として2017年に立ち上がった団体です。災害VCのICT化は、スマートフォンやインターネットの普及により、現在では多くの災害VCでの活用が進んでいます。災害VCは、災害が発生すると都道府県単位と市区町村単位で立ち上がり、社協間での情報集約や、災害VCと連携するNPO等の災害支援団体への情報発信が必要になります。情報発信では、ホームページ、関係者間のメーリングリスト(以下、ML)、SNS(Facebook、Twitter、Instagram等)などさまざまなツールを活用することで、情報連携の円滑化、ボランティアの呼びかけの推進を図ることに役立ちます。しかし、こうしたツールを取り入れることは簡単ではなく、専門的な知識・ノウハウ・経験等が必要となります。こうしたICT化がうまく進むよう、被災地の災害VCに入ってICT支援(ICT活用事例の提供など活用に向けたアドバイス、技術的支援など)を行っています。

災害VCでの活動は大きく3つあります。ひとつめは、災害状況を地図やグラフで「見える化」し、活動人数の把握、支援の進捗状況の把握、ボランティア配置の

過不足等が可視化され、今後の支援の進め方の検討に役立てます。具体的には、ニーズの進捗状況や一日のボランティア者数などをグラフ化したり、災害時に株式会社ゼンリンが提供する「ゼンリン住宅地図LGWAN」等を活用して、被害状況やボランティア支援の進み具合(重要度を色別で分ける)を地図に落とし込みます。ふたつめは、ICT機器(パソコン、プリンター、モバイルルータ等)のセットアップや、使い方のレクチャー、簡易マニュアルの作成などを行っています。3つめは、災害VCの情報発信を行う特設サイトやSNS・MLの開設と運営を行い、社協職員の方々に情報発信の際のアドバイスなどを行っています。

災害VCの運営には、社協や行政、地元の関係団体・住民以外にも外部からの支援団体も関わります。ICTを活用し、それぞれの団体と支援の進め方のイメージを共有し支援のベクトルが同じ方向に進むよう災害VCのサポートを行っています。

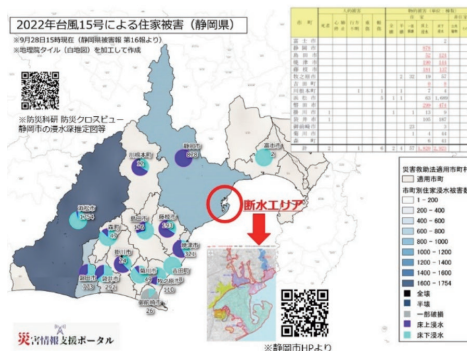
社協や関係団体への具体的支援と心掛けていること

令和4年8月豪雨では、石川県小松市の災害VCのICT支援に携わりました。フェーズ毎に必要な情報を把握・整理し情報提供を行ってきました。発災直後は被害状況が見えづらく、被害の規模感をつかむため、防災科研の浸水推定図を地図上に重ね合わせ、被害状況が把握できていないエリア情報を共有することで支援のモレを防ぎます。ボランティア支援が進むと、地図上にニーズ進捗(ボランティア支援の進捗)を落とし込み、支援の進み具合を把握しながらニーズのヌケがないよう地図情報の共有を行いました。災害VC

の閉鎖・移行判断には、地域全体の家屋復旧状況や、地図上のニーズ進捗状況を見ながら、ヌケ・モレのない被災者支援につながるよう社協職員や災害支援団体と連携を行っています。



令和元(2019)年東日本台風
茨城県太子町災害VCでの支援のようす



令和4(2022)年台風15号。静岡県内の浸水状況、エリア状況の「見える化」により、情報連携の円滑化を図ります

最近の主な被災地支援活動

令和4年台風15号(2022年)、令和4年8月3日からの大雨(2022年)、令和元年東日本台風(2019年)、西日本豪雨(2018年)、島根県西部地震(2018年)